

Title	大月明先生を悼む
Author	河音, 能平
Citation	人文研究. 39 卷 11 号, p.731-732.
Issue Date	1987
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	故大月明教授追悼号

Placed on: Osaka City University Repository

大月 明先生を悼む

河 音 能 平

四

大月明先生は、一九八六年七月十二日近畿大学附属病院に入院され、即刻手術を受けられて二箇月の療養生活を経て退院され、さっそく二学期の授業を再開されていた。ところが十二月三日再入院を余儀なくされ、一九八七年二月一六日逝去された。享年六十一歳。研究生活において収穫期を迎えられていただけに、その急逝は痛惜にたえない。

先生の研究領域は日本近世思想史であったが、そのテーマモチーフは、日本近世における儒学の受容とその日本の変容、そしてそれらの洋学受容への影響であった。これを研究対象についてみれば、渡辺華山・平賀源内などの蘭学者たち、中井翫庵・三宅石庵・富永仲基・五井持軒・五井蘭洲・中井竹山など大坂懐徳堂系の儒学者たち、三宅観瀾、栗山潜鋒・藤田幽谷ら水戸学系の儒学者たち、そしてさらに朱子学から出発して明治初期に啓蒙学者として活躍した阪谷素など、洋学から儒学各派に及んでいる。特にうずもれていたマイナーな学者たちをたんねんにほりおこし、その実証的研究によって、日本近世思想史研究に新しい光をなげかけたことは貴重な業績である。そして、私がひそかに推測するところでは、そのじみな学風を貫いていた一本の赤い糸は、日本において近代民主主義思想がどのように内発的に発展しえたかという思想変革の可能性を明らかにしたいという秘められた情熱であったと思えてならない。また先生はそのお人柄から教育に特に熱心であった。おそらく国史コースの卒業生で先生の個人的薫陶を受けなかつ

た者はいなかったであろう。

先生は糖尿病を持病として持っておられ、厳格な食事療法を守っておられた。私はこれこそ一病息災だと思って安心していたが、別の病魔が私たちから先生をうばってしまった。以上のような条件のもとで、先生はあまり諸学会や研究会に出席されず、主として大阪市立大学文学部内において研究と教育に専念された。

御葬儀は一九八七年二月一八日午後、御自宅近辺の報恩寺においてとりおこなわれた。恩師・友人・同僚・同学・受講生など多数が野辺の送りに参列した。そして一九八七年八月二十六日午後、「大月明先生を偲ぶ会」が史学教室主催でなにわ会館において開催された。四七三名に案内を出し、当日出席者は一三六名であった。欠席の返事はウィークデーのため失礼するというのが大部分であった。教室代表として私が開会の辞をのべ、次いで大阪大学文学部教授脇田修氏に「大月明氏の近世思想史研究―懐徳堂を中心に―」と題して講演をしていただいた。そのあと各層各界から「大月先生の思い出」を語っていただいた。お話をいただいたのは、大阪市立大学名誉教授森川晃卿氏・大阪市立大学教授沢雅夫氏、岡山大学教授石田善人氏・大阪市立大学名誉教授直木孝次郎氏・大阪府立堺上高校教諭大石秀隆氏(受講生)、大阪市史編纂所々員植木佳子氏(受講生)の六人であった。そして大月明先生の奥様大月隆子氏よりごあいさつがあり、史学教室の森田明教授が閉会の辞をのべて、大月先生のお人柄そのものを体現した会合は終わった。

一九八八年春には、先生の御論文を全て収録した著書『日本近世の儒学と洋学』が思文閣出版から刊行される予定である。これによって先生の学問の全容が明らかとなるであろう。これによって先生の秘められた情熱とは何だったのかを多くの人々が探ることができるようになるであろう。

先生、やすらかにおねむり下さい。